

地域の豊かさ発見

ふれあい調査のススメ【お試し版】



NACS-Jふれあい調査研究会・日本自然保護協会

もくじ

1. 人と自然とのかかわり「ふれあい」と生物多様性保全・自然保護	1
2. ふれあい調査とは？	3
3. ふれあい調査事例の紹介	
1 穴塚の里山 「聞き書き 里山の暮らし」の作成（茨城県）	5
2 山崎の谷戸 聞き書き記録集「かまくら・山崎 谷戸と暮らし」の作成（神奈川県）	7
3 白子湧水群 湧水にまつわる自然保護とふれあいの活動（埼玉県）	9
4 海上の森 開発事業に市民の声を届けるためのオリエンテーリングマップづくり（愛知県）	11
5 吉野川河口 環境マップ作成とアンケート調査（徳島県）	13
4. やってみよう！ふれあい調査	15
1 聞き取り	17
2 自然体験マップづくり	19
3 地域発見マップづくり	21
4 懇談会	23
5 アンケート	25
6 交流を深めるための素材集めと活かし方	27
5. ふれあい情報データベースを作ろう	28
6. 今後の課題と活動	30

NACS-Jふれあい調査研究会メンバー

相川明子 [鎌倉中央公園を育てる市民の会]

開発法子 [日本自然保護協会]

井口利枝子 [とくしま自然観察の会]

菊池玲奈 [東京大学農学生命科学研究科生圏システム学専攻 保全生態学研究室]

及川ひろみ [INPO法人 穴塚の自然と歴史の会]

鬼頭秀一 [東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻系教授]

曾我部行子 [ものみ山自然観察会]

富田涼都 [東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻博士課程]

高橋絹世 [緑と湧水と流れの会]

丸山康司 [(独)産業技術総合研究所 エネルギー技術研究部門]

表紙写真：伊藤信男 デザイン：(株)環境計画研究所

地域の豊かさ発見＊ふれあい調査のススメ【お試し版】

2005年9月30日発行

著者：NACS-Jふれあい調査研究会

発行：(財)日本自然保護協会 NACS-J

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F

TEL.03-3553-4104 FAX.03-3553-0139

<http://www.nacsj.or.jp>

© NACS-Jふれあい調査研究会・日本自然保護協会

このリーフレットは、日本生命財団 環境問題研究助成
特別研究助成の支援を受け「持続可能性を築く「市
民・研究者協働による生物多様性モニタリング」の研
究」の一環として作成されました。

1 人と自然とのかかわり 「ふれあい」と生物多様性保全・自然保護

生物多様性と人のさまざまな営み～生業・遊び仕事・子供の遊び～

多くの多様な生物は、単なる食う食われる関係だけでなく、さまざまなかかわりを持ちつつ、そのことによってお互いにネットワークを作り、生物多様性の富んだ自然環境を構成している。その多様なネットワークの中に人々もさまざまな形でかかわりつつ生きてきた。

農業や林業、漁業といった第一次産業の「生業」に加えて、山で山菜やキノコを採ったり、川や干潟などでさまざまな魚介類を捕獲、採取したりするような「遊び仕事（マイナー・サブシステム）」や子供たちの「遊び」といった多彩な人々の営みがあった。それは、「生業」のような、狭い意味での経済的な要素が強い営みから、「遊び」のような精神的な要素が強いものまで、色合いを変えて連続線上に位置づけられる人と自然とのかかわりであった。もちろん、経済的な要素が強い生業の営みにおいてさえ、さまざまな生き物との出会いがあり、身体（からだ）を通して感じるような深い精神的な営みもそこにはあったし、また、子供の遊びの行為の中にも、とって食べるものまで含まれており、広い意味での経済的な行為でもあった。それゆえ、それらは、そもそも、人が自然の中で、地域社会の中で「生きる」という行為の営みの中心にあるものであった。

人と自然とのかかわりに存在するさまざまな共同性と地域独自の「文化」

人が自然とかがわる、多様な営みには、かつては、そこにかかわる人々の間できちんとした利用のルールがあったし、また、さまざまな組織や制度を作ったかかわってきた。そのような社会的な仕組みが、それにかかわる人たちの共同意識を形作り、そのことにより、地域の自然をきちんと守り育て、管理していくことが可能になっていた。また、そこでの営みを通しての共同意識が、その地域独特の自然に対して、意識的ではないにしても、からだにしみついたような価値を見いだしてきたし、自然とのふれあいが、そこでみんなが共有できる価値を形作ってきたとも言える。それこそが、地域独自の「文化」であった。地域の自然はそれぞれの地域社会の生活の中心にあり、自然とかがわる営みを通じてのさまざまな共同性や自然とふれあう文化があつてはじめて、きちんと保全されてきた。

自然とのふれあい、かかわりの再構築と生物多様性の保全

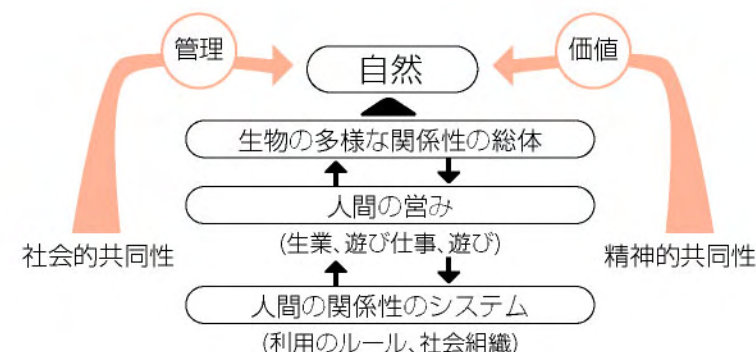
自然とかがわる多様な営みは、かつてどこにでもあった。しかし、高度成長の頃から、生産力と経済性優位の社会の中で、「生業」から「遊び」にいたる多様な営みは、狭い意味での経済的産業に限定された営みに変質されていった。「遊び仕事」はやせ細り、子供の「遊び」は衰退していった。そして、それとともに、狭い意味での経済的価値が希薄な地域の自然はその価値も見向きもされず、

管理されることなく放置され、その自然の生物多様性も失われていった。

いま、地域の生物多様性の保全を考えたとき、かつてあった経済的なものから精神的なものに至るまでの多様な営みを、いま再び、復活し、また、他の新たな営みで補っていくことが求められている。市民が農家などの地権者の人たちと協力し合って里やまなどの地域の自然の管理を行い、「農」の営みを再び甦らせたりすることは、新たな自然とのかかわりを再構築する試みであるといえる。さらに、自然観察会などの新しい形の自然とのふれあいの活動も、地域の自然との精神的なかかわりを回復するという役割を持ち、自然とのかかわり、共同性、自然とかがわる文化というものを、次世代に向けて守り育てていくための環境教育・学習の試みでもある。そのように、過去の自然とのかかわりの営みを深く知り、それを参考にしつつ、新たな形で組み換え、自然とのかかわりやふれあいの活動を再構築していくことが、いま求められている。

未来を見据え、構想していくための多様なふれあい調査

それゆえ、それぞれの地域では、自然観察や生き物の調査だけでなく、人々が多様に自然とかがわってきたその営みのあり方や自然に対する深い「思い」、社会的なさまざまな仕組みなどを調査し、その歴史的な蓄積をかみしめつつ、一方で、いま、どのような人々がその自然にどうかかわろうとしているかという新たな「思い」も調査し、それらの結果から、それぞれの地域で、今後、どのような形でその地域の自然を保全、管理し、また、かかわっていくのかを考えるための資産を蓄積していくことは大変意義深いものがある。そのような「ふれあい調査」は、地域の自然の生物多様性の保全を実現させるために必要なだけでなく、自然と共存できるような地域社会を構想し、つくりあげていくことにもつながるものである。また、その地域で自然とかがわり、ふれあいながら生きていくことの意味を確認し、未来につなげていくための作業そのものでもある。



TEXT: 鬼頭秀一

2 ふれあい調査とは？

市民の思いを掘り起こす調査

ありふれた自然だがかけがえのない場所、いつまでもそこにあってほしいと思う思い出の場所やふるさとの風景、そんな場所への思いを誰しもココロの片隅に持っているのではないだろうか。それらはきっと、里やまや近所の草はら、川原、海辺といった、私たちの生活のそばにある身近な自然であろう。

しかし、これまで開発計画の中では自然保護というと、守るべき対象となる自然の科学的価値だけがとりあげられ、レッドデータブックに載っている希少な生物がいるかどうか話題の中心になり、「普通にある」身近な自然の価値が認識されることはほとんどなかった。

それに対し、ここで提唱する「ふれあい調査」は、地域の自然の保護と利用を議論し考えるときに、自然の科学的なデータに加え、地域の人たちの土地の自然に対する思いや、幅広いかわりをも明らかにして、議論の基礎資料とすることを目指している。

人と自然とのふれあいとは？

「ふれあい調査」では、人と自然のかかわりを「ふれあい」と表している。人と自然とのふれあいは、多様である。例えば、農林漁業など生業に根ざした自然利用は最たる自然とのかわりだし、花見や潮干狩り、ハイキングなどのレジャーのほか、日常生活の中でのかわりもある。散歩途中で道端のタンポポに目がいて春を感じたり、鳥のさえずりを楽しむのも自然とのふれあいだろう。子どもの原体験、花見や山菜採りといった季節の行事、裏山の手入れや、ため池の掃除等農林業に関わる地域の共同管理、山の残雪の形から農作業の時期を知る暦や、山や海にかかった雲から天気を知るなど、日々の生活の知恵もある。山岳信仰など自然との精神的な交流や、自然を対象とした学術研究もある。最近各地で行われるようになった自然の保護・再生、環境保全を目的とした市民による自然観察会や里やま管理などの活動は新しいふれあいの形である。

ふれあい調査では、この人と自然とのふれあいを幅広く捉えていきたい。

ふれあい調査のテーマ

ふれあい調査では、市民が身近な地域の自然を将来にわたって保全するために、主に次の2つの「ふれあい」を明らかにすることが重要だと考えている。

1つは、過去から現在に至るまで、生業や生活の中でどのように里やまなどの身近な自然を利用し、どのような暮らし方をしてきたかという「ふれあい」を知ることである。つまり地域の文化、人々の自然や土地に対する思いを掘り起こし、再認識することといえる。このことは、これからの

地域自然の保全目標、具体的な保全の方法を決めるときの指針を示してくれるものである。

このテーマのふれあい調査事例として、p.5-10で、穴塚の里山、山崎の谷戸、白子湧水群における活動を紹介した。

もう1つは、今あるその自然と、地域の人たちやそこを訪れる人たちとどのようなかわりがあるか、人々はその自然に対してどのような思いをもっているのかという「ふれあい」を知ることである。これは、自然を大切に思う市民の思いをデータ化する作業でもある。これにより、その場所の開発や保全の計画を作ったり、事業をするときに、市民の思いや意見をより正確に反映させ、市民の参画を促すことができると考えている。

このテーマの事例としては、p.11-14の海上の森、吉野川河口での活動を紹介した。

ていねいに地域を見つめるスローな調査を広げよう

「ふれあい調査」提唱の背景には、地域づくりの場や、開発事業の環境アセスメントにおいて市民参加がうたわれて久しいが、残念ながら冒頭に書いたような市民の思いや意見を十分に掬い上げ、反映させていくことができていない実状がある。

したがって、常日ごろから地域に対する人々の思いやかわりを「ふれあい調査」によって掘り起こし、データを集積していくことが重要だろう。

また、開発事業や地域づくりの議論の場面では、開発か自然かという対立した議論になりがちで、行政手続などの限られた場では、対立した構図の表面的な議論で終わってしまうことが多い。一方、ふれあい調査は、時間をかけた対話のなかでデータをとるという、地道な作業である。そのため調査の過程で、さまざまな立場や考えがあることを知り、理解を深めることができる。時間をかけたさまざまな手法で地域の思いを掘り起こし、ていねいに地域を見つめる作業の中から、地域づくりの共通の指針、土台作りをしていくことが重要と考える。本書を活用して「ふれあい調査」を広げていきたい。



調査結果をみなで意見を出し合いながら、地図にまとめているところ



里やまの道端で発見した“かわり”を記録中

「聞き書き 里山の暮らし」の作成

里山を未来へ受け継ぐ

茨城県土浦市穴塚の里山は、東京から筑波山の麓までで最大の里山で、つくば市、土浦市中心部からともに約4kmという都市近郊にありながら、多様な生物の生息地である。周囲には穴塚古墳群や国指定の上高津貝塚に代表される遺跡群も豊富に点在し、歴史的にも大切なところだ。また集落は落ち着いたたたずまいを見せ、文化の香りに満ちたところだ。穴塚の自然と歴史の会は、この里山の自然と歴史を深く理解し、特性に即したよりよい形で未来に受け継ぐことを目的として、近隣の市民によって1989年に発足した。2003年にはNPO法人となり、地元、行政等と協力して次のような活動を行っている。

- 里山の暮らし、農業、文化の歴史を調べ、広める活動
- 里山の自然について調べ、保全方法を探る活動
- 里山を保全、再生する活動
- 子どもたち、若者、市民へ、里山の価値を知らせる活動——環境教育活動



納豆の作り方を地元の人から
教えてもらっている

里山のお宝発見！

里山の景観は、人々が農業や暮らしに利用する中で歴史的に形成されたもので、里山は歴史的な文化財と言える。高度経済成長期以後、農業と暮らしが大きく変化する中で、里山の様相は急速に変化した。そこで以前の里山の姿、管理、利用法、その背景となる暮らしや農業、里山の文化を記録し、保存することを緊急課題と考え、大池で出会う地元の方々から、かつての穴塚の様子を聞き取ることを続け、1997年歴史部会を立ち上げ、以降組織的に聞き書き活動を行ない次のような活動にとりこんでいる。

- 聞き書きの活動：会発足当初から継続して、穴塚のお年寄りから、昔の話を伺ってきた。40名以上の方から話を伺い、それぞれ数回から数十回の訪問を重ねて、文章化した。
- 文献資料、地図、航空写真、昔の写真などの資料収集。
- 写真、録音による記録：昔の道具などは写真で、歌、唱歌文句などは録音して記録した。

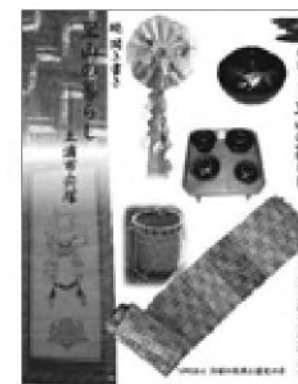
1999年には聞き書きと資料をまとめて「聞き書き 里山の暮らし 土浦市穴塚」として出版した。この単行本は、地元の歴史発掘の例として高く評価され、また地域学習の教材としての活用が期待され、茨城県の中学校推薦図書に選定された。

2005年2月にその続編「続聞き書き里山の暮らし 土浦市穴塚」を出版した。聞き書き編、テーマ編（農業用水、山、谷津田と稲作、畑と作物、住、食、衣、年中行事、動植物）、資料編の3部構成とした。

地元の方々（年配者中心）を訪ね、以前の穴塚大池周辺の状況、田畑、林の利用方法、行事、衣食住、娯楽、その他以前の生活のようすの聞き書きを続けている。お話を伺っていると、地域に生活してきた中で得た知恵、知識、苦労をかさねてきた自分史と里山に対する愛着、そこに生きてきたことへの誇りを感じることができる。また、それらを次世代に伝えたいという気持ちも伝わってくる。

聞き書きと併行して、穴塚地域に関わる資料を収集し地域の歴史、里山、農業、生活の変化の背景をつかんでいく作業もおこなっている。明治時代初頭に作成された地引帳をもとに、当時の土地利用状況を明らかにした。

人によって興味、関心事は大きく異なる。繰り返しお尋ねし、聞き書きをする中でその人の関心事を見つけ出すと話が弾む。しかし、遠い記憶の蘇えりの中で年代、内容に勘違いがあることも度々ある。個人の話をまとめる時はほぼそのまま書き表したが、テーマ偏では繰り返し聞き書きをする中で、また多くの人から同じテーマで聞くことで少しずつ軌道修正がなされ、まとめることができた。しかし、個々の興味よりもどころこそが、生き生きとした聞き書き作品になったように感じている。



「続聞き書き里山の暮らし 土浦市穴塚」

ふるさとを自慢！

今後の里山のありかたを考える上で、里山と関わる暮らしの記憶、地域の歴史を、地元をはじめとする多くの人々の共通の土台とすることなくして、里山の保全はありえないとの認識が強まった。さらに地元の人々の肉声が及ばないところに望ましい保全はないと考えている。書籍では主に、人々の暮らしが大きく変わった昭和35年ころより前の様子をまとめた。これは当時の暮らし知恵、技術、歴史の中で培われてきた文化の多くを、高度経済成長の過程で、便利になった暮らしと引き換えに失ってしまった事実を、思い知ることの連続であった。技術のみならず、人々の心の裏にひそむアイデンティティーをも失う時代であったと感じている。幸い穴塚地域の方々は今も人のつながりが心地よくあり、真に豊かな暮らしに接し、救われる思いである。穴塚のような里山はかつてどこにでもあった。この活動を始めた頃「穴塚がどこにでもあるつまらないところ」と認識していた人々も、聞き書きの作業を通して、穴塚を「自慢できる宝」と捉えるようになってきている。

古をたどり、今に生かそう

神奈川県鎌倉市の中央部に広がる、多摩丘陵の南端、三浦丘陵の北端に位置するわずかな緑地帯は、狭い水田と急峻な雑木林や段々畑が織り成す典型的な谷戸地形である。昭和40年代に全国を席巻した宅地開発の波が押し寄せ、7つの切通しで守られていた旧鎌倉の周辺部は住宅に覆われたが、この山崎の谷戸24haだけは免れた。しかし、1991年から「鎌倉中央公園」に生まれ変わる建設工事が始まった。

里やまの生態系と景観を生かした公園づくりを訴えた市民活動を発足し、最後まで耕作していた地主に弟子入りして稲作修業を行った私たちは、公園の中での里やま保全を継続していくために、既に土地を手放してしまった元地権者を訪ねて、伝統的な農作業のやり方や、燃料革命、肥料革命以前の日常生活について詳しく聞いて、手本にしたいと考えた。

聞き書き

山崎の谷戸で10年あまり市民活動を行う間に親しくなった方を中心に、次々と紹介を受け、元地権者を中心とした26人に話をすることができた。本の目次に沿って内容を紹介する。



「かまくら・山崎 谷戸と暮らし(2000)」

- 【1章】 山崎のムラの構成
 - ①山崎の地名 ②神社共有 ③共同作業
- 【2章】 山崎の谷戸の農作業
 - ①田 ②畑 ③肥料 ④山
- 【3章】 家畜と生き物
 - ①牛 ②馬 ③ニワトリ、ヤギ、ブタなど
 - ④その他の生き物
- 【4章】 暮らし
 - ①水 ②家 ③食べ物 ④結婚 ⑤嫁として
- 【5章】 子ども時代
 - ①お手伝い ②遊び
- 【6章】 年中行事と儀礼
 - ①講 ②4つの祭り ③正月 ④さいとやき ⑤節句
 - ⑥盆行事 ⑦葬式
- 【7章】 こぼれ話
 - ①富士塚 ②化かされた話 ③関東大震災 ④山崎温泉

【資料】 図 : 山崎の位置、山崎の字と屋号とムラグミ、水の流れ、生活空間

写真: 道具、場所、作業風景、昔の暮らし

絵 : 道具、生き物

おとな子どもも
こぞって田植え



地元に喜ばれて感激！

農作業の合間に昔話を聞くのと違って、記録集にまとめる目的で、録音テープ片手に1人1回2時間単位で向き合って話を聞いたのは初めてだったが、農作業を中心としたNPO活動の合間に2年間かけても、満足な質と量にはいたらなかった。しかし、10年間に谷戸で知り合った地権者の何人かが亡くなり、急がなければ昔の知恵が失われてしまうという焦燥感から、20世紀末の出版にこぎつけた。

綿密さには欠けたが、山崎の旧組織の方々には「自分たちの代わりによくまとめてくれた」と感謝された。第2刷は地元の歴史学者の監修で、信憑性のあるものに仕上がった。

今では、年中行事に顔を出せば声をかけ、農作業には道具つきで指導に駆けつけてくれる方もある。自分たちが手放した土地を私たちのような市民が引き継いでいこうとしていることを実によく理解されたと思う。

公園という、土地を所有しない形でNPOが里やま保全をしていくには、いつの時代のどんな方法で行うかという共通のルールが必要で、この本はその教科書になる。地域固有の歴史文化を絶やさず後世に伝えることを核に、里やまの自然を媒介とすることで、旧ムラ社会、新住民、行政、NPO、赤ちゃんから高齢者までが交流できる新しい地域共同体が生まれつつある。

小中学校の総合的な学習で復活！

2004年の鎌倉中央公園全面開園に前後して、周辺地域2、3の小学校の5・6年生が毎月、半日あまりの体験学習に訪れるようになった。「谷戸の米づくり」では、田植えと稲刈りだけではなく、苗作りから田の草取り、草刈り、足踏み脱穀機を使つての収穫後の始末、落ち葉かきから堆肥づくりまで、「昔ながらの畑」では、大豆を栽培して味噌づくり、大根から沢庵作りなどを行う。昔の地名の「もめんばたけ」の話に飛びついた5年生は、下草刈り、開墾に取り組んだ結果、畑が復活し、翌年は見事に綿の栽培にこぎつけた。これこそまさに自然再生の実現である。

そのきっかけになったのは聞き書きであり、古から現在そして未来へと人をつないでいく原点になりえた調査こそ、環境保全活動の要であると思う次第である。

TEXT: 鎌倉中央公園を育てる市民の会 相川明子

ふれあい調査事例の紹介

3-3 白子湧水群

湧水にまつわる自然保護とふれあいの活動

地域の豊かさ発見 ふれあい調査のススメ

武蔵野台地の湧水地

埼玉県和光市は武蔵野台地が荒川の低地に落ちる末端に位置し、市内を流れる白子川や越戸川、谷中川等に面する斜面に多くの清冽な湧水地がある。その周辺にはカタクリ、ニリンソウ、ヤマブキソウなどの群落があり、都市化が進む東京近郊において身近な自然に親しめる貴重な場所となっている。特に白子地区は白子川崖線に沿って湧水地が点在し、かつて川越街道の宿場、湧き水豊富な白子宿として栄えた歴史をもつ。

その湧水中に、埼玉県では絶滅が危惧される紅藻類のカワモズクが1998年に発見された。このカワモズクの発見がきっかけとなり、湧水環境を保全するために、その自然環境調査を会から市に要請したところ、それが予算化され、日本自然保護協会と共同の市民参加型調査がスタートした。水文・地質、水生生物、植生の3部門について専門家にも参加してもらい市民参加の調査が行われた。中でも湧水をもたらす地下水の流れを知るために、台地上の井戸のある家を訪ね、約20ヶ所を選び、井戸の維持・利用や水位について聞き取り、定期的に地下水位を測り、地下水の状態を調べた。調査を通して、井戸の持ち主をはじめ地域の人との交流や、これまで知らなかった地域の特徴を捉えることができた。

湧水利用についての聞き取り

歴史的にも重要な白子地区については、湧き水と人の暮らしとのかかわりについて聞き取り調査を行なった。宿場として栄え、その中心的な熊野神社には、湧水地があり不動の滝となって流れ出し、境内を潤している。また、各所に湧く湧水を利用して水車が稼働し、精米や粉引きに使われ、味が良いと評判のうどん屋、酒造所の在った様子がわかった。明治になって日本初の養魚場が作られた様子が版画に残っている。町内には配水用タンクが今も数ヶ所残り、そこから各家庭にパイプで引かれ、魚屋、花屋、床屋などで使われている。飲用にも使われ、近隣や板橋方面からも水を汲みに来る人が今も絶えない。当然洗い物、お風呂用としても使われている。このような聞き取り調査を通して、会の活動も湧水とのふれあい活動として地域に根ざしはじめた。



聞き取りの様子

普及活動とさらなる広がり

2年間の自然環境とふれあい調査により、この地区が武蔵野台地末端の典型的自然を有し、その自然に触れ合える場、地域の歴史や文化が残る場、子どもたちにとって郷土学習、環境学習の場としての重要性が明らかとなった。さらに3年目に市内全域に調査を広げた。3年間の調査から市全域の特徴的な自然環境を捉えることができ、これを「湧き水と緑地マップ」としてまとめ、広く市民が地域を探索する資料となっている。また調査の間、市の「広報わこう」に会員が調査の経過やエッセイを「湧き水のまち白子だより」として毎月連載した。これをまとめ、撮り続けた写真を加えて、冊子「和光の身近な自然探訪」を出版した。多くの方から支持され翌年増補版も出版し、根強い人気がある。この湧き水マップと冊子は地域の人との交流や、小中学校での総合学習の資料にも利用されるようになった。

長い間の調査とその経験・結果を生かし、和光の身近な自然を知り、親しむために市民への観察会を色々工夫して行っており、白子の湧き水が市民や学校にも知られるようになった。さらに白子湧水利用者に広く呼びかけ、湧水懇談会を開き、保全のための方向を検討している。また、和光市環境づくり市民会議にも委員として参加し、調査や市民とのふれあいの成果を基に、

市の環境改善に提言を行っている。交通の便がよい都市部の湧水地・緑地は急速に失われマンションに姿を変えている。その中で、古くから湧水を利用している人たちからは、湧水と触れ合える公の場を残していきたいという思いが感じられる。私たちは、この地元の思いと行政をつなぎ、将来、まちなかに湧水のせせらぎをつくり、それを保全する住民の環や、災害時の水の利用に結びつく「ふれあい」に発展させることを理想として活動を継続していきたいと考えている。

TEXT: 緑と湧水と流れの会 高橋綱世



和光市 湧き水と緑地マップ
発行/2002年4月 和光市建設部都市整備課
(財)日本自然保護協会

3-4 ^{かいしよ}海上の森 開発事業に市民の声を届けるための オリエンテーリングマップづくり

愛知万博と海上の森

愛知万博の予定地とされた海上の森(540ha)は、大都市名古屋に隣接した場所にありながら、レッドリスト上の生物が100種以上を超える多様な生物を育む豊かな里やまである。わたしたちは、1990年から愛知万博計画に対して、自然に決定的なダメージを与える都市化を辞めるよう働きかけてきた。オリエンテーリングマップづくりは、その活動の一環として万博の環境アセスメントに意見する中から生まれた。

愛知万博検討会議を経て、万博会場は当初の10分の1に縮小されたが、たとえ15haであっても、より自然にととの都合を考えた土地造成であってほしかった。場所がどのようにデザインされ利用されるのかに、市民の思いを反映させる参加方法として、オリエンテーリング形式のアンケート調査を、2005年愛知万博瀬戸会場域内において実施した。そのため、アンケートの内容も会場案に反映されるように設定した。

自然利用の程度について、現場をあるきながらアンケート

まだ工事が始まっていない2002年2月、愛知万博瀬戸会場予定地約15haにおいて、歩いて1周できるような一定の間隔で20ヵ所に番号札をかけた。参加者は対象地域の地図とアンケート用紙20枚を持ち、地図上の番号にしたがって順番に歩き、番号の場所でアンケートに答えた。20枚のアンケートに答え終わると、1周のハイキングを終えることになる。

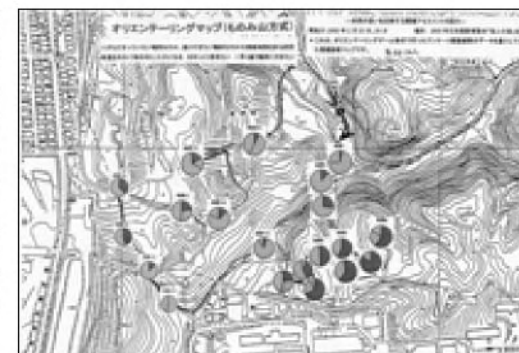
アンケートの内容は
3つに絞った。

- 自然への人の入りこみがどのくらいなら適当か 「入りこみ」
- 人が手をいれるとしたらどのくらいが適当か 「手入れ」
- どれほどの時間そこにいたくなるのか 「滞留時間」

結果は、3段階の円グラフで表現した。点数の1番高いものを緑に、2番目を水色、3番目を黄色にした。その結果、「手入れ」の必要がないと思う場所ほど「滞留時間」も長くなる傾向が強かった。場所によっては、道路を整備したり、ベンチなどの人工物を作ってほしい人と、このままでいいと思う人が半々だった。「手入れ」の必要がないと答えた場所では、ほとんどの人が「滞留時間」を長くとりたいと答えた。一方で「手入れ」の必要がない場所だからといって、「人の入りこみ」が少ないということはなかった。これは、自然を強く感じる場所では一人でいるより数人で、あるいはみんなで過ごしたい気持ちも強くなるということになるのだろうか。興味深い結果となった。



オリエンテーリング中
番号札をかけたところで
アンケートに答える



アンケート結果を地図にまとめたオリエンテーリングマップ

調査をやったこと

苦労したのは、パソコンのソフトが使いこなせるかどうかで、マップの見やすさが左右されることだった。得意な人の協力があれば見栄えの良いマップになって、情報を発信する助けにもなるに違いない。今回は、円グラフを別に作成して切り抜き、マップに貼りつけた。

会場の造成についての結果では、評価が低かった黄色の多い場所が多く改変された。しかし、登りの狭い坂道で、見晴らしがよいため高い評価となった青色が多い場所は消失してしまった。一番改変してほしくなかった南の斜面はほとんど土地改変されずに遊歩道とされた。ただ問題なのは、今回のマップづくりが、市民参加の提案として万博計画に反映されることがなかったことだ。万博は市民参加でと言われていたが、博覧会協会や愛知県に持参したくても肝心の窓口はどこにもなかった。事業者側に計画段階から市民の視点や思いを反映する想定がない限り、せっかく実施しても市民参加の戦略として事業計画に活かされることがないという事実が残った。

しかし、たとえ市民参加の努力が、政策や計画に直接反映されることがなくても、日頃から対象地域の自然をさまざまな人々と共有することや、それを通じた仲間づくりをしておきたい。生物を中心にした自然観察は、好きな人々にとっては興味の尽きない方法である。しかし、誰しもが関心を持つ方法ではないこともまた事実だから、自然観察などとは別の方法として地域に根ざした情報を得るスタイルとして活用できるだろう。

また、対象地域が「どうあってほしいと思っているのか」が人によって違うことがしばしばある。話が噛み合わないのはそのためであることが多い。あまりにも違っていると、大切な場所をどうするのかの方向性を見失わせることになる。それをカバーするためにはどうすればいいのか。一つには、お互いの感覚を磨いたり、共有するための機会が必要だろう。科学技術や学術的な知識からこぼれがちなそこに住む人々、生業や兼業に利用する人々、あるいは楽しんでしげしげ歩く人々、そこに行かなくてもあることをよしと願う人々、そのような多様な人々が主体的に参加できる機会の1つとして、オリエンテーリングマップづくりを試みた。

ふれあい調査事例の紹介

3-5 よしのかわ かこう 吉野川河口

環境マップ作成とアンケート調査

吉野川河口の開発と保全にむけて、市民の思いをひきだしたい

四国三郎の呼称をもつ吉野川。河口から第十堰がある14.5km地点まで広がる汽水域は、吉野川の多様な生命や暮らしをつないでいる。ここには、今日、失いつつある日本の河口本来の姿がある。河口に広がる干潟は、生物多様性に富んでおり、河口干潟としては国内でも有数の規模と景観を誇っている。また、徳島市の中心地からわずか10分ほどの距離にあるにもかかわらず、良質な海苔やシジミを産出し、第一級の健全な干潟生態系が保持され、バードウォッチングや散歩、子どもたちにとっては、豊富な生きものと触れ、戯れる絶好の場所となってきた。また紀伊水道に向かって大きく広がっていく河口の広大で雄大な風景は人々に大きな安らぎをもたらしており、県内外の人々がこの河口を訪れ、豊かな水辺環境にあることのよこびと安らぎを満喫してきた。



吉野川河口

ところが、吉野川河口域が複数の開発の危機に曝されることになった。港湾人工島計画や環状道路橋と高速道路橋の2本の架橋計画など複数の大型公共事業によって、河口干潟の自然は切り刻まれようとしている。特に、河口干潟の中枢部を通過する道路橋は、水面や空間の遮蔽によって干潟環境や生態系への影響が心配される。

これらの工事は、私たちが便利で快適な生活を追求するなかで生み出されてきたものであるが、私たちは、この工事によって何を失いつつあるのだろうか。徳島のシンボリックな存在である吉野川河口の景観や身近な自然や生物を失うことへの危機感や心の痛みを多くのの人々と共有し、保全に結びつけるためにはどうすればよいのだろうか。

私たちは、吉野川河口の生態学的な特徴と価値がわかる環境マップを作成することで、開発によって何がかわるのか、何を失うのかを予測できる資料として活用できると考えた。

そして、その価値を多くの市民に伝え、吉野川河口の保全に関心をもつ人々とのネットワークを広げていくことを目標とした。

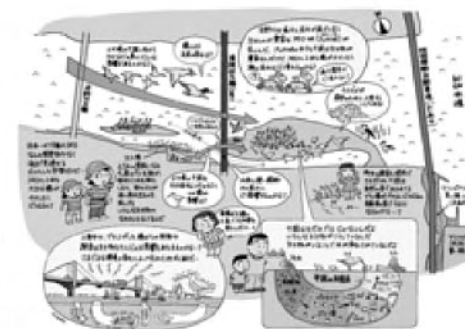
吉野川河口干潟の生態系の特性を伝えるための環境マップの作成

河口干潟にはシギ・チドリなど多くの渡り鳥が飛来し、160種以上の野鳥が観察されている。レッド・データブック掲載種であるシオマネキやリュウノヒゲなど、今や各地の干潟から姿を消しつつある生き物がごくあたりまえに見られる場所でもある。このような吉野川河口干潟に生息する生物や、架橋建設による自然環境への影響予測について、自然観察会や調査で情報を集め、その結果を環境マップにまとめた。このマップは、1万部作成し、学校の環境学習、

自然観察会やシンポジウムなど様々な機会を捉えて配布し、身近な自然である吉野川河口の価値を伝えるために活用した。



干潟パンフレット



吉野川河口環境マップ

人々の思いをひきだすためのアンケート調査

河口の環状道路橋の着工を目前にして、徳島市民は河口の環境や周辺の開発計画に対してどう思っているのか、「あなたのなかの吉野川とは」と題したアンケート調査を行った。商店街、駅前、スーパー前など街頭で声をかけて832人の市民の意見を得た。幅広い年代から意見が集まったが、特に10代の若い人たちが真剣に考え、答えてくれたことが非常に印象に残った。

アンケートの項目は、「吉野川の河口の干潟を知っていますか」「河口の干潟のまわりの開発計画のことは知っていましたか」「吉野川で好きな風景や場所はどこですか？その理由は？」「いま、あなたは吉野川とどんなつきあい方をしていますか」などであった。

アンケート結果から、人々は多岐にわたって、日常的に吉野川とのふれあいの機会をもっていることがわかった。また「吉野川の好きな風景や場所はどこですか」という問いかけに対して、たくさんの人が「河口の風景や広がり」と答えている。道路橋の計画については、「橋がほしい」とする回答は、全体の6%、また橋が架かると「便利になってうれしい」「自然より便利さ優先」とする回答数は全体のわずか3.9%にすぎなかった。一方、「環境や景観への影響が心配」とする回答数は全体の37.5%、「計画について知らせて欲しい」とする回答数は全体の25.8%であった。吉野川河口に思いをもつ人々が多いこと、市民には公共事業の情報がほとんど届いていないことには今さらながら驚きであった。それなのに、なぜ開発は続くのだろうか。



街頭アンケートの様子

公共事業が行われる場合の環境影響評価では、人々の思いや人々の心理への影響はほとんど評価されない。「人と自然との豊かなふれあい」の評価というのは、目にはみえないがこういった「思い」への影響を評価することが重要であると強く感じる。私たちは、このアンケート調査結果を事業者へ届け、市民の声を事業に反映させるよう働きかけた。

TEXT: とくしま自然観察の会 井口利枝子

4 やってみよう! ふれあい調査 —こんなとき、こんな調査を—

事例でも紹介したように、「ふれあい調査」は、愛着のある身近な自然を将来にわたって大切に守っていきたくて願う市民の、粘り強く地道な活動の中から生まれた。調査方法については、まだ実践例も少なく、確立したものがあるわけではないが、これらの事例に学び、いくつかの方法を紹介する。

身近な自然を保全したいと思ったとき、あるいは自然科学や生物に詳しいわけではないが何か保全のための行動を起こしたいと思ったとき、この「ふれあい調査」をきっかけに第一歩を踏み出してみてもはどうだろうか。きっと次のステップにつながる何かが見つかるはずである。まずは気軽にやってみよう。

ふれあい調査への入り口

例えば、こんなとき…

【里やまで…】
雑木林の手入れや田んぼの耕作をして、生き物呼び戻し、里やま環境を保全したいが、方法が分からない

【市町村で…】
市民参加の地域計画作りの場ができたので、そこに参加し、自然保護の提案をしたいが、何からやればいいのか分からない

【開発計画が持ち上がって…】
自然や生物には詳しくないが、環境アセスメントや事業者、自然環境保全のための意見をだしたい

【ずっとそのまま…】
子どものころから親しんだふるさとの自然、風景をずっと残していきたいが、いつ開発されてしまうか分からない
今できることはないか

【〇〇〇〇…】
あなたの実践を教えてください

こんなことが分かれば…

● かつての土地利用を知りたい

● かつて行われていた土地の農作業の方法を知りたい

● 地域のどこにどんな自然や文化、歴史、人と自然とのふれあいのお宝があるかを知りたい

● 地域の自然や歴史・文化的な場所・ことの重要性、利用方法を検討したい

● 市民が自然とふれあう場としての重要性をデータで示したい

● 一定の場所の自然を開発することなく保全したいという市民の願いを意見としてまとめたい

● その自然、風景に対する人々の思いを調べまとめたい

● こんな材料があれば…

こんな「ふれあい調査」をやってみては？

【聞き取り】
長くその土地に住んでいる人、お年寄りなどに、かつての自然の様子、土地での暮らしなどについて話を聞き、記録する

【実地体験・研修】
作業の方法などについて、地元の人から実践を通して直接学ぶ

【過去の地図や写真の読み取り】
土地利用図、迅速測図や空中写真など

【自然体験マップ、地域発見マップづくり】
現地を歩き、さまざまな視点で気づいたことを、地図に書き込んでいく。記録のしかたは、写真やスケッチなどいろいろな方法が考えられる

【懇談会】
地図・写真などを囲んで、かつての自然の様子、土地での暮らしなどについて話しあう

【アンケート】
テーマに関する問いを設け、それに答えてもらい、意識を調べる

● 【新しいふれあい調査】

調査したら…アウトプットと活用法 工夫して効果的な方法を見つけよう!

調査経過の速報をニュースレターにまとめ、話を聞いた人など調査に関わった人たちに配布しよう

冊子にまとめ、活動の道具として使おう

見やすいマップや、グラフ・図表にまとめ、さまざまな場への意見提出の資料、行政等との話し合いの資料にしよう

マップやレポートにまとめ、計画づくりなどの会議の参加者や市民に配布し、検討の資料にしよう

学習会やシンポジウムなどを開催して、そこで多くの人に伝えるときに資料にしよう

面白く、わかりやすい、新しい調査結果のまとめ方、活用法を考えよう

TEXT: 開発法子

4-1 聞き取り

1 目的

今まで、その土地でどのような自然とのかかわりの仕方があったのか、農業のやり方から、ため池などの管理の仕方、さまざまな遊び仕事や子どもの遊び等について、一般論的で有名なものは、さまざまな文献で取り上げられていたり、市町村史誌類に記述があったりする。しかし、文献資料などがない場合が多く、そういう場合には、その地域で生活を送ってこられた人々から聞き取りを行うほかはない。

また、現在の人と自然とのふれあいについての「思い」を知るためにも、アンケート調査に留まらず、具体的な語りを聞き、言葉に込められた深い意味や「思い」というものを感じ取るためにも、聞き取り調査は大事な方法である。

2 用意するもの

【筆記用具】

必ずメモをとるための道具を用意する。いわゆる大学ノートを使ってもいいし、野帳（例えば測量野帳）として売られているものを使ってもいい。大学ノートの方が大きくて書きやすいので室内では有効であるが、歩きながら聞き取る場合には、野帳の方がコンパクトで書きやすい。もちろん、その場で書きやすく、後で整理しやすいものであれば何でもよい。

【録音機】

聞き取り内容は、録音して後で活字化した方が正確で聞き落としもない。ただし、聞き取る内容によっては、利害関係や権利関係など微妙な問題がある場合、記録が残るということで話し手が話をセーブしてしまうこともないわけではなく、録音しないという選択も有効な場合がある。また、録音する場合には、聞き取りの確認のためにだけに用いることを相手に伝え、了解を得ることが必要である。録音機は、汎用性のある普通のカセットテープレコーダーで十分だが、録音時間や活字化の際の頭出しなどの機能を必要とするのであれば、ICレコーダー、MDレコーダーも有効であろう。

【カメラ、地図など】

現物をそのまま写真に撮ることは有効である。また、生業や遊び仕事、遊びのやり方に関しては、現地で写真やビデオに撮り、自分で体験してみるのもいい。現場を歩いて確認するためにも、聞き取りの時に出来た場所を確認するためにも地形図などの地図が有効である。他にも、4-6ではさまざまな小道具を紹介しているので参照されたい。

3 方法

聞き取りにあたっては、相手との信頼関係を築き、人間としての礼儀をわきまえた行動を取る

ことが基本である。事前に電話などで予約を取った方がいいのか、聞き取りの場所、何う時間帯、聞き取りの時間などについては、ケースバイケースであるが、お話を伺うわけなので、相手の都合を押し量り、礼を欠くことがないようにしたい。聞き取りにあたっては、事前に質問項目を整理して、それを見ながら聞き取りたいことに遺漏がないようにした方がいいが、一方的に聞きたいことを聞くという姿勢ではなく、相手の話のテンポに合わせ、多少話がずれてもじっくりお話を伺うことが肝要である。むしろ、聞き取り調査を通して、相手の方との人間的なふれあいや信頼関係を育んでいくことが重要であろう。信頼関係が深まれば聞き取り内容の質も高まる。

4 実施上の留意点

ここで取り上げるふれあい調査は、いわゆる学術調査ではなく、実践的な活動という意味を持っているので、きちんと正確に過去の姿を再現することが大事なこともあるが、それ自体を目的化するのではなく、この調査を通じて、その地域で自然とのかかわりをどう再構築していくかという大きな目標を意識するべきであろう。それゆえ、その土地のことを熟知しておられる地域の要職や教育職等にあった古老の方々だけでなく、さまざまな年齢層、さまざまな職業の方々に、伝聞ではなく、その生活の中での地域での具体的な自然とのかかわり方を聞き取り、そこで「思い」を受け止めていくことが大事である。

聞き取り後は、簡単でもある程度結果をまとめたものをお返しすることも重要である。正確さを期す場合には、聞き取り内容についてまとめたものを読んでいただき、チェックしてもらうことも信頼関係を深めるためにも意味がある。

5 結果のまとめ方、活用法

項目別にまとめていくことも意味があるが、聞き取りをした人によっては、何度も何度も通って、個人史のようなものをまとめ、その中で、その地域の自然の中で生きることの全体像を明らかにしていくことも意義深い。また、場合によっては、地図に落とし込むとか、絵図のようなものを書いてまとめるものというやり方もある。特に、その地域で情報を共有し、チェックしていくために役立つ。

得られた調査内容は、その地域の自然を今後どのように保全し、管理し、また、かかわっていくのかという今後の活動に生かしていきたい。それが、ふれあい活動の幅を拡げることにもなる。その地域での、自然とのかかわりも含めた、より広い将来的な計画を構想していくためにも大きな資産になると思われる。

聞き取り調査は、何らかの情報を得てまとめる「調査」であるが、それと同時に、その聞き取りの作業を通じて、相手の語りに共感をもちつつ、地域のことを真摯に学び、新住民の方が地元の方と交流を続け、信頼関係を作り上げていくことにこそ深い意味がある。ふれあい調査の核心がそこにある。

TEXT: 鬼頭秀一

参考文献：宮内泰介「自分で調べる技術—市民のための調査入門」岩波アクティブ新書（2004）

4-2 自然体験マップづくり

— 地域を主体的に診断できる人を育てる —

1 目的

身のまわりの環境を考え、再発見し、他の人々と交流しながら地域のあり方の共通認識を育てることを目的とする方法のひとつに「環境診断マップ」(環境庁・あおぞら財団,2000)がある。これを、都市化していない自然環境に応用して考えた方法が「自然体験マップ」である。

自然環境の様子を捉えようとしたとき、そこに生息する生物相など、自然科学的調査で得られる情報以外に、気持ちのいい水辺、美しいと感じる風景など、人が五感で捉える自然がある。こうして捉える自然の姿、価値は、人と自然とのふれあいを示す情報として重要である。

「自然体験マップ」は、植物、鳥、虫、魚などの生物に詳しくない人にも、子どもにも、個人でも仲間とでもできる自然環境把握の方法で、多くの人でその土地の自然の情報を共有するために、結果は視覚的なマップを作成してまとめる。

2 用意するもの

歩くルートを線で書き込んだ白地図、氏名、実施日など個人情報を書き込む用紙、自由に書き
 込める用紙、筆記用具、クリップボード、方位磁石など。

3 方法

参加者全員がルートに沿って歩きながら、下記の凡例にならない、+（プラス）評価には○印をして横に数字を○1、○2、○3…のように書き入れる。-（マイナス）評価には●印をして横に数字を●1、●2、●3…のように書き入れ、+評価と-評価の区別が分かるようにする。その上でなぜ+評価だったのか、-評価だったのかの理由を別用紙に記入する。

また、共通に評価する場所(地点)をルート上に5ヶ所ほど設ける。そこでは必ず立ち止まり、全員で評価する。

【+評価の例】

○1水の音が気持ちいい ○2鳥の声がした ○3木々の様子が美しい
○4眺めがいい ○5お弁当が食べたくなる ○6寝転んで時間を過ごしたい 等等

【一評価の例】

●1ゴミが落ちていた ●2歩きにくくて疲れる ●3生き物の気配がない
●4不自然な感じがする ●5暗くて陰気な感じがする
●6雰囲気を壊す人工物がある 等など

4 実施上の留意点

何を目的にした調査なのかをまず参加者に説明することが大切である。ルートが書きこまれた白地図を持って歩く場合、対象地域を始めて歩く人にはかなりの冒険である。地図の読めない人や子どもが参加する場合は、地域を知っている人が後から歩くようにする。マップ上に表現できないほど多い情報を書き込まないように注意を促す。

5 結果のまとめ方、活用法

それぞれが作成したものは個人別の自然体験マップ記録である。次に、それを他人のものと比較してみよう。それぞれ＋評価と－評価がどんな項目内容だったのかを発表し合うことで、お互いが何を気持ちがいいと感じるのか、逆に何を嫌だと感じるのかの共通点や相違点に気づくことができる。その上で、＋と－評価の絞込みを話し合っ
て決めることができれば、参加者全員で情報を共有することができ、1枚のマップにまとめることも可能になる。

里やま自然のよりよい保全の方法を探るためにこのマップを活用するとしたら、一評価はどうすれば+にできるのかを考えることで活かされる。



海上の森の白地図(例)

自然体験マップづくりシート

調査項目	年	月	日	天気
調査開始に集まった児童の数を記入して下さい。初めて　回　数えられないけど				
性別				
学年				
もしよければ顔写真、服装などを写し込んでください 印刷　下				
氏名				

調査の手順

①地図を見ながら1～6の順番に歩きます。

②歩いていて感じたことまで書き込みます。気づいたことあったものの名前を記入します。
その場所がよいと思えば、ふじざん、**琵琶湖の琵琶生**など事に数字をつけ、○は、◎などのマークをつけてください。その数字やマークが地図に入ります。

★評価の例　②水の色が気持ちい　③水の音がした　④水の色がきれい　⑤緑が美しい　⑥空気が爽やかなる　⑦遊歩道で時間を感じてほしい　等など
立ち止まった理由も自由に書き添えて、「**ふじざん**」**琵琶湖の琵琶生**を通して数字に●★。

●★、●★のように書き添えてください。その理由は別紙の記録に記入します。

一評価の例　◎水が清々しいた　◎歩きにくくて疲れる　◎生き物の気配がない　◎自然然な環境です　◎帰って来たいの感じがする　◎琵琶湖を渡る工夫がある　等など

⑧地図に付すのA～Jまでの数字が記れていない場合、そこでは必ず書き添えて評価してください。

自然体験マップづくりシート(例)

一〇アドバイス、マナー

- せっかく作成する地図には色を塗ったりして、視覚的にも楽しくなるような工夫がほしい。そのためには、樹林の大きな違いが分かるように、人工林、雑木林、マツ林などを色分けしたり、田んぼ、水辺の色分けなどもしておくと、なぜ、多くの人がここで気持ちがいいと感じるのか、生き物に会えるのかとわかるヒントになるだろう。
- 四季によって場所から受け取る情報は違うことも予想できる。1回だけでなく何度か季節を変えて実施すれば、より多くの情報が得られるだろう。マップづくりで養った感覚を周囲の自然環境すべてに向けてるようにつなげられるとよい。

TEXT: 曾我部行子

参考文献:あおぞら財団編集 つくってみよう身のまわりの環境診断マップ
環境庁企画調整局環境影響評価課(2000)

4-3 地域発見マップづくり

1 目的

その土地の地形をベースに、風土があいまってその地域独特の風景がかもし出される。それが景観である。景観は、私たちが住む地域の個性を表している。つまり景観を見れば、その地域の自然や文化、人々の暮らしや産業を知る手がかりが得られるのである。開発などによって地形が改変されれば、景観は変化する。景観の変化は、人や生物の暮らしの条件の変化をも意味する。景観を保全し、地域を特徴づける景観を活かしていくことが、地域らしい暮らし、文化や自然を継承していくことでもある。

ここで紹介する調査は、私たちが住んでいるまちを特徴づけているものはなにか、誇れる眺望場所はどこか、まちのよいところや問題となっているところはどこかなどについて、目に見える景観を手がかりに発見し、再認識していこうというものである。その結果を共有しあうことで、地域の価値を発見し、地域らしさを維持し、豊かな自然環境を守ることにつなげることを目標としている。

2 用意するもの

地図(国土地理院発行の地形図・市街図など)、空中写真、カメラ、テープレコーダー、(あれば昔の空中写真、昔の絵図、古図)など

3 方法

a.環境マップの作成

地形や生物、植生など自然環境の調査や自然観察会など直接自然とふれあう場面で得られた情報を、分かりやすいイラストや短い文章などで地図に書き入れ、記録する。そのフィールドを特徴づける動植物の分布状況、生活史や生態を調べて、地形図にのせて環境マップをつくる(p.13-14参照)。見られる生物で季節感を表すことができればおもしろい。

b.タウンウォッチング

自然観察会など、様々な年齢の人々の参加でまちを探検しながら、地図の上に発見したことを記録したり、写真で景観を記録したり、景観について感じたことを記録する。例えば、シンボリックな景観、美しい景観、保全すべき景観、改善したい景観など。

さらに、目に見える景観情報に様々な情報をのせてみる。例えば、地域の古老やまちかどの老舗、農家などで聞き取りを行う。この時昔の空中写真などがあれば具体的な話が展開できる。人々の暮らしを知り、歴史を学んだり、古くから語り継がれてきた物語を発掘したりして、景観に文化的、歴史的な情報をのせて意味づけをおこなうことで、まちかどのスポットを再確

認したり、日常見慣れた景観を改めて見直し、地域の優れた景観を抽出するなど、景観に社会的な価値をみいだすことができる。子どもたちや様々な年齢の人々が、同じ空間に居合わせることでお互いに気づいたことをもとに語り合い、場に記憶として残る思いや暮らしぶりといった情報を分かちあうことができる。景観と人々の思いを重ね合わせることで、雄大な景観だけでなく、小さな場の大切さにも気づくことができ、地域らしいまちづくりにつなげていくことができる。

自然や生物を中心にした環境マップづくりと、人の暮らしや町並みなどを中心としたタウンウォッチングはそれぞれ別の機会を設けて実施するか、同時に実施するかは、現場の状況に合わせて、試行してみるとよい。



タウンウォッチング風景



タウンウォッチングの結果をまとめたニュースレター

4 実施上の留意点

眺望など視覚的情報は誰でもわかりやすいが、人々の記憶や思いをマップづくりにできるだけ正確な情報として反映させるためには、たとえば「橋や大きな道路が開通した」「池が埋め立てられ市場になった」「学校の体育館が落成した」「海水浴場が廃止された」など明確な節目と、回想で語られることがらとを結びつけ、位置づけることが大切である。

また、地形や自然といった地域らしさは、景観に表れているが、目で見て捉えられる景観だけでなく、音や匂い、肌で感じる風の流れなど、五感で景観を捉えるとさらに情報を得ることができ、重要である。

5 結果のまとめ方、活用法

調査結果をイラストで表したり、地域発見マップなどにしてわかりやすい情報にすることで、私たちが大切にすべきもの、また何が変わってしまうのか、何を失うのかを予測する資料として活用することができる。

さらに、タウンウォッチングの結果は、多くの市民にわかりやすい形で伝えるために、パンフレットやニュースレターの形にまとめ、学校や公民館に配布したり、学習会を開いて発表するなどして活用する。開発の事業者との意見交換会の場などでは、環境マップと併せて、市民の思いや地域でだいたいしていきたい景観や自然環境について伝える資料とし、環境配慮型の工事やまちづくりを提案する根拠として活用することができる。

TEXT: 井口利枝子

参考文献: 鶴ヶ崎編集・写真: 島内英佑「吉野川の贈りもの 40年の時の流れ」(2003)

4-4 懇談会 —交流の機会をつくり、情報を共有する—

1 目的

地域での懇談会の開催目的は、a.顔合わせや親睦のため、b.地域についての知識や情報の共有と理解促進、c.地域での自然環境保全活動を立ち上げや発展、など段階に応じていくつか考えられる。しかし、いずれにしても、さまざまな人がかかわって、その土地の自然や人と自然とのふれあいを捉えようとする場合は、お互いの考えや思い、その変化を継続して確認し合う交流の場として、適宜懇談会を開催するのは有効である。

2 用意するもの

話すだけだと、同じ言葉を使っている、指しているものやイメージが人によって異なっていることが多い。したがって共通認識を深めるためには、新旧の地図や写真、文献、ビデオなど、具体的な資料を用意するとよい(p.27参照)。

また、意見交換を活発化させるために、地域の自然や歴史に詳しい人の講演(話題提供)を設けてもよい。開催場所は、目的に合わせて、人が集まりやすい公民館や地域センター、学校、屋外(観察会や花見、ピクニック形式等)などを準備する。

3 方法

湧水地の保全のために、湧き水の利用や暮らしについて、新旧住民や地権者の親睦と相互理解の促進を目的に、和光市白子地区(p.9参照)で開催した湧き水懇談会を例に懇談会開催の手順を示した。

【懇談会の手順(例)】

立案	4-3ヶ月前	地域の特徴をどのように生活に生かしているかを聞き、地域への思いを語ってもらうために懇談会を企画した。新旧の居住者や地権者など多様な人が参加し、和気藹々とした話しが進むように配慮した。
趣旨の伝達と案内状の作成	2-1ヶ月前	テーマが明確になる案内状を作成した。地域の主だった人に事前に開催の了解を得た。自然保護地の地権者等の了解を得た。呼びかけ：一般には案内状の送付、地域の新聞や市の広報誌などに掲載、主な地域の人には案内状を持参した。
開催内容の設定と打合わせ	1週間前	当日は初対面の人が多いことを想定し、司会者と司会補佐兼進行係を置き、話題が途切れないように工夫した。記録係をおき、お茶と菓子を用意した。
当日の進行	当日	開催趣旨を分かり易く伝えた後、自己紹介と会のテーマにつき短く発言してもらった。約1時間で前半を終了し、休憩時間にビデオを上映した。休憩後、前半の発言を基にテーマに関する話し合いを深めた。知識を異にする参加者のために、新旧の地図、新旧の写真などが有効であった。和光高校放送部製作の地域紹介ビデオが好評を得た。



白子宿絵地図(2004)

聞き取りによって、かつての白子宿のようすを絵地図に再現した。この絵地図は懇談会の貴重な資料となった。

制作：加藤洋子 資料提供：福島正夫 絵：佐藤香織

懇談会の風景



昔の写真をみながら、当時のようすについて聞いているところ

4 実施上の留意点

参加者に子どもや親子がいる場合は、例えば湧水に生息する生物の観察など地域の自然を体験するイベントを加えるとよい。また、まだ交流がはじまったばかりの頃は、複数の話題提供者に参加してもらい、対話の広がりを持たせるようにし、自由な対話を大切にする。

5 結果のまとめ方、活用法

懇談会の様子は、参加者の了承を得たうえで、テープやレコーダーに録音し、後日テープ起こしを行う。内容は、テーマに沿って簡潔に要点を整理して記載し、地域新聞等に公表する。

1回だけの開催でなく、新旧の住民や若い世代とのコンセンサスの形成へ発展させる懇談会を積み上げていき、懇談会等を通して得た地元の意見を集約し、今後の地域計画づくりに反映させていけるとよい。また、古老の話などをこれからの地域の環境問題等に結びつく面を整理していくと有効だろう。

—ロアアドバイス、マナー—

- 関わる地権者の人には、事前に開催の許可を得ておき、参加を促す。参加協力者には、後日、お礼の電話や報告をする。

4-5 アンケート —人々の意識を引き出すために—

1 目的

人と自然の関わりを、人の側から調べる方法には、大きく分けてアンケートと聞き取りという二つの方法がある。二つの方法を比べながら、アンケート調査の特徴と目的について紹介する(聞き取り調査についてはp.17を参照)。

表に示したように、アンケートと聞き取りには、それぞれ特徴がある。アンケートは多数の人を対象として、結果を数値としてまとめる方法として優れている。しかし、調査をする人が事前に想定していること以上の情報は得られないし、ある情報から芋づる式に質問を深めていくということも困難である。こうした点は聞き取りの方が優れているが、その一方である地域全体の傾向などを知る方法としては不適切である。

総合的に見れば、聞き取りは何かを発見する方法として優れており、アンケートは聞き取りなどで得られた印象や情報を確認する方法として優れている。どちらの方法をとるかについて、重要なのは、調査をする人が何のために、何を知りたいのかということである。意見の分布などを何パーセントといった形で表現し、行政への政策提言などに活かすのであれば、アンケート調査は有効といえる。アンケートの良いところは、やり方さえ注意すれば、素人でも専門家に負けない結果を比較的容易に得られる点である。一方、個人個人の自然との関わりの質や深さといったことを明らかにするには、聞き取り調査の方が優れている。私たちが通常手にする情報はすでに文字や映像になっているものがほとんどだが、こうしたものは全体のごく一部であり、情報の大部分は人々の記憶の中に埋もれている。

表:アンケート調査と聞き取り調査の特徴

	アンケート	聞き取り
対象者数	多数	少数
質問の回数	現実的には1回のみ	何回でも可能
結果のまとめ	容易	困難
情報収集範囲	質問者に依存	質問者+回答者
費用	比較的多額	比較的少額

2 用意するもの

何よりも大事なものは、自分たちが知りたいことを予め具体的に把握しておくことである。途中で変わるの構わないし、むしろ必要なことでもあるが、出発点の問題意識ははっきりさせておく必要がある。できれば予備調査を実施し、質問方法や内容について検討する機会があった方がよい。インターネットなどでも色々な調査の例が紹介されているので参考になる。

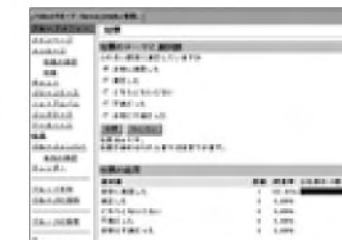
3 方法

郵送以外に町内会などを通じて質問用紙を配布する方法や直接訪問する方法がある。住民台帳などをもとに、無作為に対象者を選ぶのが一般的だが、最近では行政の理解がないと難しい。

回収できた回答はエクセルなどの表計算のソフトで処理する。横軸に質問項目をとり、一人一行を使って回答を数字で入力する。

最近ではインターネットを活用したアンケートもある。データ入力などの手間が相当省ける。ただし回答者が偏る傾向があるので注意が必要である。図のように、質問をつくるだけで投票可能なサイトもある。会員などを対象とする場合には簡便で良いかもしれない。

図:Webアンケートの画面(例)



4 実施上の留意点

調査にあたっては以下のことに注意すると、説得力のある結果を得やすくなる。

〈代表性を考える〉どのような人を対象にして、どのように回答者を選ぶかということが調査結果の信頼性に大きく影響してくる。例えば、公園などで街頭アンケートを実施しても、その結果を市民の意見と見なすことは難しい。一方で、「その日にその場所を利用していた人」の意見としては参考になる。

〈選択肢の作り方〉一つの質問に対する選択肢が偏っていると、適切な結果を得られない。例えば、それぞれのことがばが意味する範囲がずれていないかなどに注意する必要がある。また、一つの選択肢の意味が二重になること(例「生き物や風景が大切なので…」)は避ける。

5 結果のまとめ方、活用法

エクセルなどの表計算ソフトで、大抵の集計作業が可能であり、グラフも作成できる。また、方法のところで説明したサイトでは、集計作業まで自動化されている。

集計結果は、できれば報告書などにまとめたい。目的のところで説明したように、アンケートは情報を確認する方法として優れている。だが、何故そうなるのかといった疑問には答えてくれない。こうした部分については、他の資料なども活用しながら考えて結果をまとめる必要がある。

アンケートは手間暇がかかるが、例えばある場所の開発の是非を問い直す、あるいは話題にすらなっていない新たな選択肢の有効性をアピールする根拠としては有効である。

TEXT: 丸山康司

参考文献他:宮内泰介(2004年)「自分で調べる技術—市民のための調査入門」岩波アクティブ新書
大阪大学・質問紙法に基づく社会調査データベース(<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp>)
内閣府・世論調査(<http://www8.cao.go.jp/survey/>)
アンケートツール(<http://groups.yahoo.co.jp/>)※会員登録が必要

4-6 交流を深めるための素材集めと活かし方

聞き手がよく知らないものを「聞きとる」のは案外難しい。聞き手が生まれていない昔の事はその典型例だろう。ここでは、そんな昔のことを調べるときに役に立つ素材をいくつか紹介したい。

過去の写真

地域の昔の写真には、その当時の人の営み、衣食住、子どもの遊び、森や水辺といった自然の姿など、ありとあらゆるものが写っている。昔の事を知らない聞き手にとっては、これらを眺めるだけでも当時を知るきっかけになるし、「これはなんだろう？」という好奇心の始まりにもなる。一方、語り手にとってもこうした写真を見せられることで、詳しく説明することができたり、忘れていた事を思い出すきっかけになったりもする。撮った場所がわかれば、現在の同じ場所の写真と比べても面白い。

こうした写真は、地域で写真を趣味にしていたひとがいればよく残っていることが多く、地域の博物館・資料館・公民館、郷土史家などが収集している場合もある。また、市町村史や自治体の刊行物に掲載されていることもある。なお、1950年代に刊行された『岩波写真文庫』には、当時の日本の様々な写真が収録されている（基本的に古本でしか手に入らないが、1987年～1990年に一部が復刻されている）。

昔の地図（地形図・迅速測図など）

昔と今では地形そのものが違っている場合が多い。昔の地図を調べると、町並みや、水辺や森がどのように広がっていたのか、遊んだ場所がどこであったのか、そしてそれらがどう変化したのかなどを正確に知ることができる。また、関東の平野部では、明治初期にフランス式の彩色地図（「第一軍管区地方2万分1迅速測図原図」）が作成されていることがある。この地図は地形図というよりも絵地図に近く、森の木の種類など、明治初期の土地利用を知ることができる。

国が発行していた昔の地形図（旧版地図）は国土地理院から入手可能。また、フランス式の彩色地図は「明治前期手書彩色関東実測図」として復刻されているほか（大規模な自治体の図書館や大学図書館などで収蔵している）、一部が「明治前期測量 2万分1フランス式彩色地図」として（財）日本地図センターで販売されている。

空中写真（航空写真）

空中写真をみると、地図よりも地形や町並み、自然の様子などをより詳しく知ることができる。森林科学などの分野では、この空中写真から地上の植生をかなり詳しく判定する研究もされている。全国的に撮影された最も古い写真は、終戦直後に米軍が撮影したものであるが、場所によっては昭和初期に撮影されたものもある。

これらの空中写真は（財）日本地図センターで販売されているが、米軍撮影のものも含めて国土地理院で閲覧することができる。また、インターネットで公開している写真もある（例えば、国土交通省国土情報ウェブマッピングシステムなど）。

TEXT: 富田涼都

5 ふれあい情報データベースを作ろう —ふれあい調査を形に残す—

ふれあい調査の成果は、参加した人自身の満足感が一番かもしれない。地域の自然や自然と関わる様々な営みを知ることは、地域発見の楽しさを教えてくれる。その一方で、成果を広く共有する方法を考えることも重要である。そのような方法のひとつとして、ここでは地図を使って地域のふれあい情報を表現する方法を紹介する。

コンピュータを活用する

最近では、パソコン用の大部分の地図ソフト（一部はポケットコンピュータ用も）が人工衛星を使って現在地を把握する機能を持っている。図1は市販の地図ソフト（昭和堂のマップル）を活用した例を示した。また、同じような機能を持つデジタルカメラや携帯電話も市販されている。こうした道具を使えば、フィールドでの行動範囲の軌跡が自動的に記録される。また、生き物の情報や自分が気に入った場所など、気がついたことを地図上に自由に記録できる。たくさんの人が集めた情報を集約すれば、データベースとして活用することも可能となる。

人と自然とのふれあいや景観のような情報は漠然としているため調査が難しいとされてきた。だが、こうした方法を使えば、ある土地のどのような場所が重要とされているかを表現することが可能になるだろう。この方法の強みは、生き物などの客観的な情報だけではなく、人々の想いや印象といったことがらも明確に扱うことができる点にある。

実験的な試みも一部では始まっていて、専用のソフトや携帯電話をつかって情報を入力する方法も開発されつつある。図2は、富士山周辺に投棄されているゴミを地図上に記録した例である。



図1: 地図ソフトを使った場所情報

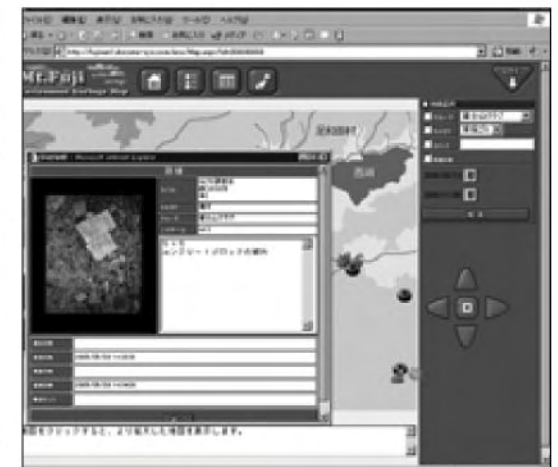


図2: ゴミを題材とした
地理情報システム

地図を書く

もっとも簡単な方法は自分で地図を書いてしまうことである。この場合、必ずしも正確な情報である必要はない。一人一人が自分の地域を描き、それを同じ地域の人と共有するための手段として活かすことができれば十分である。例えば、図3のように

- 水・地形・土壌といった地理的な情報
- そこに生育・生息している植物や動物(哺乳類・鳥類・昆虫類など)といった生態学的な情報
- 地域に対して人間が与えている良い影響と悪い影響という社会的・文化的な情報

を書き込むだけでも地図になる。これはバイオリージョン(生命地域)マップと呼ばれているものだが、「私にとっての地域」を表現する手法である。ワークショップなどに活用すると、地域の情報を共有する方法として活用できる。また他の人の地図と重なって「私たちの地域」の思わぬ広がりや気がつく場合もある。



図3:バイオリージョンマップ

TEXT: 丸山康司

参考情報: NPO法人 富士山クラブ(<http://www.fujisan.or.jp/>)富士山環境ゴミマップ(<http://fujisan1.docomo-sys.com/eco/Top.aspx>)

京都精華大学での地図づくりワークショップの紹介

(http://www.kyoto-seika.ac.jp/jinbun/kankyo/magazine/magazine_098.html)

6 今後の課題と活動

本書ではふれあい調査のいくつかの事例と具体的な調査方法を紹介してきた。調査目的や方法、対象によってその成果は異なるが、ふれあい調査は、調査の過程で、地域の自然を介して地域内外に新たな人と人のつながり、コミュニケーションを生み出す点が大きな特徴となっている。この点を活かし、ふれあい調査を、自然と共存した地域づくり等における合意形成のための方法として育てていきたいと考えている。

しかし、ふれあい調査は、まだ一般には広まっておらず、自然観察会など保全活動に参加している人でも関心が低い。またアンケートや自然体験マップ調査など地味な調査という印象があるためか参加者集めが難しかったり、聞き取りやアンケートによる意識調査など、人の感覚を通して得るデータは、自然科学調査の客観的データとは質が異なるため、データの客観性をいかに確保し表現するかが難しいなど、課題もある。

私たちは、本書の発行を出発点に、ふれあい調査の意義を普及し、実践を集め、調査方法を改善して、課題の解決や、ふれあい調査のデータベースづくりに取り組んでいきたいと考えている。そして多くの人にふれあい調査に関心をもち、実施してもらえることを願っている。本書を手にし、「ふれあい調査をやってみよう!」と思われた方、あるいは、「自分たちの活動はふれあい調査にあたる」というみなさまには、ぜひ下記についてご協力くださいますようお願い申し上げます。

～あなたの「ふれあい調査」を教えてください～

ふれあい調査方法の改善と普及のため、ふれあい調査の実践事例に関する情報を集めています。下記の項目について、情報をお寄せくださいますようお願いいたします。

- | | |
|------------|--|
| 1. テーマ | 5. 結果(どのようにとりまとめたか) |
| 2. 目的 | 6. 成果物(冊子などあれば) |
| 3. 調査内容・方法 | 7. 調査結果をどのように活用したか |
| 4. 調査期間 | 8. 本書「地域の豊かさ発見*ふれあい調査のススメ」について
改訂したほうがいいと思う点、やってみて気づいた点など |

【送り先】

〒104-0033 中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F 日本自然保護協会 保護研究部 ふれあい調査係
TEL 03-3553-4104 FAX 03-3553-0139